

〔共同研究：地域資料の保存・活用ネットワークの実践に関する研究（Ⅱ）〕

近世・近代堺の都市史・地域史研究の可能性

島田克彦

はじめに

本稿は、桃山学院大学総合研究所の共同研究プロジェクト「地域資料の保存・活用ネットワークの実践に関する研究（Ⅱ）」（14連241）の成果論文として、大阪歴史科学協議会（以下、「大阪歴科協」と略記）が実施した都市堺のフィールドワーク「近世・近代堺の街歩きと『堺市史史料』」（2017年度11月例会。11月12日実施）の成果を記録したものである¹⁾。

堺市では明治期に市史編纂が試みられ、『堺大観』と名付けられた稿本と史料集が残された。1924年（大正13）には市史編纂部が設置され、市域から全国に及ぶ史料調査・収集が行われた。市史編纂事業は『堺市史』全8巻（1929-31年）の刊行に結実するとともに、調査・収集した歴史資料の複製原稿を「堺市史史料」として整理・製本し、長期にわたって保存するという貴重な成果を遺した。その活用可能性は、近世堺の都市社会や堺奉行による支配の解明を目指した大阪歴科協2016年度3月例会「近世堺の法と社会」（山下聡一報告「堺奉行の『寺社改』と都市社会—17世紀後半—」，島崎未央報告「天保期堺における油市場設定と地域社会」）において示されたところである²⁾。

以上を踏まえて大阪歴科協2017年度11月例会は、「堺市史史料」を所蔵する堺市立中央図書館を訪問して史料を閲覧・見学し、史料の成り立ちや、成立から現在に至る保存の経緯について理解を深めることを目的として準備された。あわせて、空襲を免れ、「元和の町割」や伝統的景観を今日に伝える旧市街地北部および北東部をたずね、都市堺の近世・近代史を地域史的視点から学ぶこととした。フィールドワークの準備と案内・解説にあたり竹田芳則氏（堺市立中央図書館）、中村晶子氏（堺市文化財課）、矢内一磨氏（堺市博物館）から多大な協力を得、大阪歴科協研究委員である山下と島田が取り進めた（当日参加者は26名）。本稿は、当日の記録として島田の責任でまとめたものである³⁾。

1) 大阪歴史科学協議会は歴史科学協議会加盟の在阪歴史学会である。大阪歴科協は、2003年に組織された「シンポジウム地域資料の保存と活用を考える」実行委員会の構成団体であり、実行委員会が運営する地域資料研究会には筆者ははじめ大阪歴科協委員が参加してきた。

2) 山下報告・島崎報告については、大阪歴史科学協議会『歴史科学』第233号（2018年6月）掲載論文を参照。

3) 竹田芳則報告をはじめとする例会の記録は『歴史科学』に掲載される予定である。

キーワード：堺市，都市史，地域史，地域歴史資料，堺市立中央図書館

1. 環濠以北に形成された工場地帯 ―七道駅前―

我々は南海電鉄南海線七道駅前に集合した。環濠の北西部から堺市街地へ入っていくのであるが、それに先だって環濠以北に広がる七道村と周辺一帯の近世・近代について考察した。七道駅前に立つ石碑「放鳥銃定限記」(2017年堺市指定有形文化財)は、その格好の素材である。1914年(大正3)、大和川染工所を経営する柳原吉兵衛発起の運河開削工事中に、寛文4年(1664)に砲術家川名金右衛門が建立した石碑が発見された。碑文は、鉄砲師範小濱民部丞嘉隆の事績や七道にあった鉄砲射場の由来を記す⁴⁾。そこで、『堺市史』編纂の中心であった三浦周行(京都帝国大学)の撰文(1928年)と斎藤実(海軍軍人・政治家)揮毫の題字とともに大きな石材に嵌め込み、現状の形態に仕立てたのである。

近世の代表的な鉄砲産地である堺において、環濠外側の北西部には鉄砲射場が広がっていた。その痕跡が、近代において都市堺の工業化に向けた開発の過程で発見されたのである。1929年(昭和4)の地形図から、この一帯に大和川染工場をはじめ、瓦斯会社、木管工場、梅鉢鉄工場、大阪織物会社、大日本セルロイド会社(1910年頃建築の赤煉瓦建物群が2008年に解体着工。現イオン鉄砲町店)の立地が確認される。また大道筋に沿った並松町は1898年(明治31)の大阪府宿屋営業取締規則で木賃宿営業地に指定されていた。つまり20世紀初頭の七道地域一帯(1894年、向井村七道を堺市に合併)は、比較的大規模なものを含む工場街であり、かつ下層民衆の集住地をその内部に抱え込んでいたと見られる。

これらの工場には、朝鮮や沖縄の出身者が働いていた。1924年の朝鮮総督府調査⁵⁾によると、大阪織物や大和川染工所のほか、岸和田紡績堺分工場などに朝鮮人労働者の勤務が確認される。柳原吉兵衛は自ら経営する工場で朝鮮人を使ったほか、朝鮮人留学生を支援する活動に取り組んでいた⁶⁾。「放鳥銃定限記」の題字が朝鮮総督を務めた斎藤実によることも、これらと関係していると思われる。また、沖縄県大宜味村喜如嘉出身の金城美佐氏は1930年代から戦時期に、箕島紡績を経て、労働者約千人、同郷の友人を含め沖縄出身者も大勢働く大阪織物工場に入ったと語っている⁷⁾。七道駅前に立つ石碑の背後には、近代堺の工業化が環濠外部で進む中、植民地朝鮮や沖縄出身者が労働者としてこの地で働き、生きた事実が潜んでいるのである。

2. 山伏町周辺の「新地」「地持坊主」屋敷群など ―環濠西北端にて―

南海線のガード下をくぐり、行程は環濠西北端へと進んだ。ここからは、元禄2年(1689)「堺大絵図」⁸⁾を手がかりに、近世以来堺の町空間を構成してきた町屋敷の規模や道

4) 『堺市史』第七巻別編(1930年)、832-834ページに翻刻と解説が掲載されている。

5) 朝鮮総督府『阪神・京浜地方の朝鮮人労働者』(1924年)。国立国会図書館「近代日本デジタルライブラリー」にて閲覧。

6) 泉大津市・桃山学院大学連携事業2017年度第1回企画展「柳原吉兵衛とアジアの留学生」。

7) 福地曠昭『沖縄女工哀史』(那覇出版、1985年)130-132ページ。

路幅を体感しながら街歩きを進めていく。

元禄2年に調製された絵図は、寺の区画を桃色に着色し、「寺屋敷之内借家」には白色□印、「祠堂屋敷」には青色△印を付した。元禄4年、堺奉行は寺社改を実施し、寛永8年(1631)以降の建立寺院を「新地」とし、絵図上にその結果を付箋で表記した。元禄5年、幕府は現存する「新地」を承認して以後の新築を禁止し、「新地」とされた寺は「古跡並」と位置づけられた。こうして堺奉行によって寺が三段階にわたって把握されることになり、その結果が絵図に記録されているのである。環濠西北端の山伏町とその周辺には、境内を「非人借宅」としている「新地」寺院があり、その隣接地に「非人屋敷」「ひじり屋敷」が確認されるケースや、絵図作成時点で寺であった「地持坊主」屋敷群が、元禄4年寺社改で「地持坊主、屋敷並」と把握されたケースが確認される。また山伏町内の「善教寺正春祠堂掛屋敷」は青色△が付されているが着色・付箋はなく、町屋敷として扱われていることがわかる。

「新地」「地持」「地借」は、一七世紀末時点で近世都市堺を「創出」する都市政策の必要から堺奉行が設定した範疇である。絵図上で把握されたように、本来の寺地ではない空間に由緒の浅い(寛文期の「寺庵五ヶ寺組合」編制後)寺院・寺庵が寺地を求めて進出し、流入していたが、堺奉行はこれが治安攪乱要因となる危険性を察知し、その対策を実施したのであった。フィールドワークでは、旧山伏町とその周辺(北旅籠町西三丁)⁹⁾で絵図を手がかりに現地比定し、環濠都市周縁地域の社会＝空間構造への接近を試みた。

3. 「中濱一丁目」の都市空間 —北旅籠町西1丁にて—

我々は、北半町の町並みを左に見ながら東へと行程を進め、堺市立町家歴史館清学院(2002年登録有形文化財)に到着した。元禄2年大絵図には「中濱一丁目」の一角に「山伏清学院」とある。ここは三宝院末の修験道場であった。ただし大絵図によると町屋敷として扱われており、町制機構による支配下に置かれていたと考えられる。

山伏清学院は、「郷(さと)修験」と呼ばれる、町の生活や民間信仰と関わりながら営まれる、山伏の道場であった。西六間筋に面して本尊不動明王が祀られ、庶民信仰を集めてきた。実際に、山伏と地域住民の間には、祈祷や子の名付けといった日常的な営みを介した関係が形成されていたという。また、清光堂と号する寺子屋を兼ねていたことも、山伏清学院が地域にとけ込むことを容易にしたであろう。近世末から明治初年の教科書や天神机(脚裏に「文化五戊辰…」の墨書あり)が現在に伝わる。堺の町名や奉公人請状、借用証文等を手

8) 前田書店出版部編『元禄二己巳歳堺大絵図』(前田書店, 1977年), 朝尾直弘『都市と近世社会を考える』(朝日新聞社, 1995年), 堺市博物館『堺復興—元禄の堺大絵図を読み解く—』(特別展図録, 2015年)。

9) 明治5年(1872)の区設置, 戸長・副戸長選任を経て, 4月に堺市街地の町名大改正が実施された。これによって近世の町は廃止され, 大道筋の町名を基準に東・西の町目を呼称とした。『堺市史』第3巻(1930年), 822-829ページ。

本とした読み書きの学びは、商工業者の子弟が厳しい経済条件のもとで生活を確保していくことを念頭に置く教育であった¹⁰⁾。また清光堂は、山伏町生まれの仏教学者河口慧海や、慧海の幼少からの友人で支援者でもある肥下徳十郎が学んだ寺子屋でもある。

元禄2年大絵図で、山伏清学院と区画が鍵の手に入り組んで隣接するのが鉄砲鍛冶・井上関右衛門の町屋敷である。寛文年間に建築され、以後増築が相次いだ居宅兼作業場兼店舗(堺市指定有形文化財)¹¹⁾から1万点に上る古文書が発見され(2014年)、現在堺市にて調査中である¹²⁾。井上関右衛門が中濱一町目の町年寄であったことから、鉄砲鍛冶関係(古文書と銃の現物)のみならず町政関係古文書が豊富に遺されている。宗門帳と水帳から150年に及ぶ期間の住民と土地の異動を追跡できる可能性があるという。明治期以来の堺市史編纂事業で、この文書群が把握されなかったのは謎であるが、この発見によって堺の都市史研究の飛躍的発展が見通される。戦災や再開発を免れた都市空間における地域歴史文化の蓄積を将来にわたって保存していくためにも、長期的視点に立った調査・研究の条件を整えていくことが望まれる。

元禄2年大絵図によると、中濱一町目には芝辻や榎並屋といった鉄砲鍛冶の姓・屋号が複数確認され、周辺の町も同様の傾向を持つ。鉄砲鍛冶が地域の主要産業となっていたことがうかがわれる。中濱筋の道幅は3間、裏筋に当たる西六間筋は道幅2間である。軒数は西側20軒、東側15軒、間口の合計はそれぞれ59.5間、60間となる。これが中濱一町目の空間規模である。現在に至るまでに若干の変更はあるものの、基本的にはこの規模での生活が営まれ続けてきた。今後井上関右衛門家文書の研究が進むことで、都市空間をより歴史的・具体的に把握し、その中に近世の鉄砲鍛冶を位置づけて捉えることが可能となっていくであろう。

4. 近代の醤油醸造・販売業者が遺した町家と史料 —内田家住宅にて—

井上関右衛門家住宅を後にした我々は行程を大道筋まで進め、内田家住宅(北旅籠町西1丁)に到着した。内田家住宅は、1877年(明治10)頃建築の、通り庭形式の町家である。かつては醤油醸造・販売業を営んだ綿谷喜平氏の所有であったが、現当主(内田勲氏)の父親が、1948年(昭和23)に綿谷氏から購入したものである。内田家住宅では、内田勲氏の案内で、太い梁と大黒柱を持つ吹き抜けの土間や、2階を見学させていただいた。2階では、壁面造り付けの重厚な簞笥や、内田氏が綿谷氏から引き継いだ醤油販売関係史料の見学が可能である。史料として、売り掛け帳や得意先への挨拶廻りの記録(手ぬぐいなどを配る)といった帳面類の他、ハングルで書かれた醤油の広告が伝わっている。ハングルの広告は、前記し

10) 和田充弘「寺子屋清光堂の自筆往来物について(続編, その一) —堺市博物館保管「清学院文書」から—」『堺研究』第40号(2018年3月)。

11) 飯塚浩二『東洋への視角と西洋への視角』(岩波書店, 1964年)の口絵に、井上関右衛門住宅の外観と内部の写真が掲載されている。

12) 『朝日新聞』2017年4月18日掲載記事。2018年1月21日には資料調査報告会「蔵のとびらを開いてみれば」(堺市・関西大学なにわ大阪研究センター主催)が関西大学堺キャンパスにて開かれた。

た工業化段階の地域住民にも対応した生業の痕跡といえよう。

内田家住宅は、街なみ環境整備事業に基づいて修復された町家の一例である。この事業は、「歴史的な町なみ」を再生するため、堺市と住民が作成したガイドラインに基づく住宅の建築・修理について工事費の一部を国・市が補助するものである。2011年度から13年度にかけて、堺市歴史的風致維持向上計画協議会が堺環濠エリアと百舌鳥古墳群エリアについての景観、町なみ再生などの事業計画を策定、国の認定を受けて10年間の事業がスタートした。この事業を堺環濠都市北部地区において推進する住民組織として町なみ再生協議会が2014年5月に設立され、今日に至っている¹³⁾。内田家住宅一階の一部は、協議会と堺市が運営する堺町家案内所として利用され、地域情報を提供する街歩きの拠点となっている。こうした空間において、地域住民の生活に歴史が息づいていることの意味を実践的に問う営みが探究されているのである。

5. 寺町・農人町と中土居の空間構造 一寺町から土居川公園へ

我々の行程は大道筋を南へ進み、綾ノ町電車停留所を過ぎて錦之町東1丁へ到着した。ここには堺市立町家歴史館山口家住宅（1966年重要文化財に指定）がある。近世山口家は市街地であって北庄村（北庄・中筋・舳松・湊＝堺廻り4か村の一つ）の庄屋（「町庄屋」と呼ぶ）を務めた家柄である。元禄2年大絵図では、東の山之口筋（絵図では「神明山口町」などと表記）を表側とする北鏡屋町に、山口家の屋号を用いて「越前屋久右衛門」と記されている。1888年（明治21）生まれの当主義一氏は東京帝大卒業後、政友会所属の衆議院議員として活躍した。堺環濠都市の北東部に位置する錦之町付近は空襲による焼失を免れ、近世以来の町家を今に遺す地域である¹⁴⁾。堺市は、近世初期に建築された主屋を有する山口家住宅を改装して保存措置を施し、内部を公開している。ただし今回は時間の都合で立ち寄らなかった。なお、ここまでの行程には中村晶子氏に同行いただき、随所で解説をお願いした。

錦之町東に立つと、大道筋から東へ山之口筋、寺町、農人町、環濠、中土居へと続く、都市空間の展開を体感できる。さらにその外部空間に、近世山口家が庄屋を務めた北庄村を含む、堺廻り4か村の領域が広がるのである。我々は寺町へと行程を進めた。元禄2年大絵図で桃色に着色された大小の寺院が帯状に連なる地域である。屈曲した道に沿って、月蔵寺から経王寺へ向かう。かつての経王寺敷地の一部には、現在堺市立錦小学校がある。1873年（明治6）、堺市中にあった堺県学分校を第三大学区第十六中学区の下に位置づけ直したが、錦小学校はこのとき置かれた第一番小学に由緒を持つ¹⁵⁾。

元禄2年大絵図では経王寺南側に十輪院、覚応寺、万福寺、浄福寺が隣接し、神明寺町の

13) 堺市文化財課『堺市歴史的風致維持向上計画』（2013年）、町なみ再生協議会のWebサイト（sakaimachinami.jp）による。

14) ただし浄得寺（錦之町東2丁）の柱に見られるように、戦災の痕跡を残す地域でもある。大阪歴史教育者協議会堺支部『歴史たんけん堺』（2011年）。

15) 『堺市史』第3巻（1930年）、861ページ。

通りを挟んで北御坊（現・本願寺堺別院）が立地する¹⁶⁾。現在でもこの空間構造は維持されている。我々は通りに面した小規模寺院のひとつ、覚応寺（九間町東3丁）に立ち寄った。近代の住職が与謝野晶子・鉄幹と親交があったことで知られる寺院である。堺市史史料によると、1920年代の『堺市史』編纂時に70点近くの所蔵史料が確認されていた。現在、堺市博物館に「覚応寺文書」が寄託されている。堺市史史料の筆写原稿と堺博寄託文書を照合すると、筆写と現物ともに確認できるものがある一方で、現時点では筆写でしか確認できない史料や、逆に「堺市史史料」に収められていない文書が現存する場合もあることがわかる。過去に行われた史料調査の成果と、現所蔵者への伝来状況に一致とズレが見出されるわけだが、継続的な調査と保全の必要性を示す具体例といえよう¹⁷⁾。

筆写史料と現物の両方が確認される覚応寺文書の代表例が、「佐久間宇右衛門様御代御公儀御触留帳」である。この史料には、堺奉行佐久間（元禄元年霜月入部）が元禄4年に寺社改を実施し、4月27日に「南庄」を、次いで28日に「北庄」（大小路を境とする南組・北組に対応すると思われる）を巡回、北御坊、浄福寺、万福寺、覚応寺を訪問した際の状況が記録されている。先にも述べたとおり、17世紀末の堺において近世都市空間を「創出」する都市政策として、堺奉行が与力らとともに市中寺院を徹底的に調査し、寺院整理を進めた痕跡が確認されるのである。

本願寺別院には、1872年（明治5）に堺県庁が置かれた。慶応4年（1868）正月に堺奉行所跡（車之町字殿馬場）に置かれた大阪裁判所出張所は同年閏4月に堺役所と改められ、同年6月に大阪府より和泉国管地を堺役所管下に移して堺県を設置、藩治が残存する中での県行政が始まった。この時点で県庁は旧堺役所に置かれたが、関宿藩領30ヶ村編入など管地の拡大、廃藩置県（直後に岸和田県や伯太県などを合併）を経、堺町への区設置と新町起立・町名改正（明治5年）が進行する中、本願寺別院に県庁が移転したのである¹⁸⁾。

我々は神明寺町の通りから土居川公園へ出た。農人町の空間には新しい住宅地と公園が開発され、埋め立てられた土居川は国道26号と阪神高速堺線となり、かつての面影は残っていない。元禄2年大絵図には、環濠都市北東端の中土居上に「新地」「地持坊主」の屋敷並が描かれている。土手幅3間の空間に、寺地と町地が縞模様状に並んでいるのである。「宝樹」「願入」「浄信寺」といった法号や寺号に「地借」「地持」「新地」であることを示す付箋が添えられているのは、元禄4年寺社改の痕跡であろう。堺奉行佐久間は、大絵図と寺社改によって歴史の浅い、零細な寺庵を中土居上に把握していったのである。これに対して「浄信寺掛

16) 本願寺堺別院所蔵資料については、国立歴史民俗博物館の共同研究において調査が行われている。藤田裕嗣編『元禄「堺大絵図」に示された堺の都市構造に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第204号、2017年。

17) 1960年代に編纂された『堺市史続編』は、1930年代以降の合併町村の歴史叙述と旧市域の近現代史叙述が主な目的とされたが、「堺市史史料」収録史料の追加調査も実施された。この時、覚応寺文書についても原史料の調査が行われ、『堺市史続編』第5巻（1974年）に、「佐久間宇右衛門様御代御公儀御触留帳」を含む史料3点の翻刻が掲載された。

18) 山中永之佑編『堺県布令集』1（羽曳野市、1992年）、312ページ。

屋敷」(貸家であろう)は町屋敷扱いである。なお、さらにその以南には「樽屋」屋号を有する零細な町屋敷が連続して確認される。この空間が「新樽屋町」(明治5年以降は戎之町東6丁)である。

6. 「堺市史史料」をはじめ関連史料の見学・閲覧 ―堺市立中央図書館にて―

土居川公園にて、フィールドワークの行程を終えた我々は、徒歩で南海高野線堺東駅前まで移動し、駅前から南海バスと「堺まち旅ループ」バスに分乗して堺市立中央図書館(大仙町)に向かった。図書館では竹田芳則氏(同館司書)と矢内一磨氏(堺市博物館学芸員)の解説で明治期以来の市史編纂事業の歴史を学び、「堺市史史料」をはじめとする関連史料を見学・閲覧した。今回の見学に際して、①『堺大観』稿本、および『堺史料類纂』など関連史料の稿本(1901~03年)¹⁹⁾、②『新聞抜萃帳』(1923~30年の『堺市史』編纂事業関連)、③「堺市史史料」稿本全145冊の一部・複製絵図類・写真編、と多岐・多数にわたる史料群をご準備いただいた。長期にわたる市史編纂事業の成果が受け継がれ、堺の都市史や地域史研究の条件が明らかになる見学会となった。戦災や災害等による史料滅失の歴史を経験してきた堺であるが、所蔵者や関係者の努力によって史料が保存され、将来にわたって活用できる環境が維持されてきたのである。今後は市民や研究者による調査・研究・活用を通じて、さらに史料の価値を明らかにし、地域社会に深く定着した形で保存されていくことが期待される。

おわりに

今回のフィールドワークを通じて体感できたのは、堺の旧市街地において、町並みに歴史が息づき、町並みと一体となって地域資料が遺されてきた事実である。これは、環濠西北端から北東部という戦災と再開発を免れた地域ゆえのことである。ただし、この地域でもコインパーキング化した区画やシャッターの目立つ商店街も見られるように現代都市社会の抱える困難と無縁ではなく、歴史のなかで失われた地域資料も少なくないであろう。こうした現状の中で、市民による町なみ再生事業の立ち上がりによって、伝統的な町割りが地域の基盤として生命を保ち得る地域づくりが実践されてきた。このような地域の一画で、自治体史編纂の延長上に持続的な史料調査が行われ、新たな資料群の発見も実現したのである。地域資料研究会では、前稿で土地そのものと結びつく資源としての地域資料という論点を提起した²⁰⁾が、今回堺の旧市街地で接することのできた広い意味の地域資料は、まさに土地や地域のあり方と一体で把握し、理解すべき地域の資源といえよう。現在に至るこうした地域のあ

19) 堺市立中央図書館の市民ボランティアグループ「堺メモリークラブ」は、『堺大観』稿本(1901年)に貼付された明治期堺の風景写真を調査した。その成果は、『堺大観―明治と現在』(堺市立中央図書館、2014年)として刊行された。

20) 島田克彦・後藤真・谷合佳代子「地域資料の豊かさを社会に活かす営みとは―オープンデータ化のなかで―」『桃山学院大学総合研究所紀要』第43巻第2号、2017年12月。

り方の実現は、資料所蔵者を含む地域住民の方々と、自治体史編纂事業を継受し、あるいは文化財行政を実践的に担ってきた行政各部署の担当者との協調・連携が生んだ最大の成果である。こうした地域のあり方を将来にわたって持続させていく営みの中で、地域史研究の真価が問われていくことになるであろう。

(2018年5月16日受理)

図 1930年（昭和5）頃の堺市街地（北東部）



1929年（昭和4）修正測図の1：10,000地形図に加筆して作成。清水靖夫編『明治前期・昭和前期大阪都市地図』（柏書房，1995年）所収の地形図を使用。1 南海線七道駅 2 旧山伏町 3 旧中濱一丁目 4 内田家住宅 5 山口家住宅 6 覚応寺 7 本願寺堺別院 8 高野線堺東駅

Possibilities for Researching the Modern and Early Modern Urban and Regional History of Sakai

SHIMADA Katsuhiko

The efforts of a long-term history compilation project for the city of Sakai have been passed down to various government departments, primarily the Chuo Library, creating the conditions to research the urban and regional history of Sakai. In addition to this, fieldwork in the ringed moat area in the northwestern and northeastern regions of Sakai's old town, which escaped war damage and redevelopment, has led to the discovery of regional historical documents that breathe new life into the town's history. While Sakai has lost many such documents due to war and natural disasters, these documents have been preserved through the efforts of collectors and affiliated individuals, who have conserved them so that they can be used in the future. Moving forward, we can expect that through investigations, research, and use by citizens and researchers, the value of these historical documents will become clearer, and they will be preserved in a way that is deeply rooted in the local community.

Keywords: Sakai City, Urban history, Regional history, Regional historical documents, Sakai City Chuo Library

桃山学院大学

総合研究所紀要

Vol.44 No.2 2019.1

〔特定個人研究〕

論 文

知られざる敵性外国人：

オーストラリア人の見たタツラ収容所の日本人（2）……………金 本 伊津子 （ 1 ）

バングラデシュ独立戦争の映画表象 ……………南 出 和 余 （ 15 ）

3歳からできる「たべたのだあれ？」視力検査

——三歳児眼科健診で行なわれている視力検査の現状と課題から——……………高 橋 ひとみ
衛 藤 隆 （ 31 ）

共働的コミュニティにおける人の採用・教育・成長

——ネットトヨタ南国のケース—— ……………山 田 伊知郎 （ 43 ）

〔共同研究〕

論 文

《琉球—沖縄》における海上からの「来訪者」と天変地異の「記憶」

——ウルマ島とニライカナイをめぐる——……………一 色 哲 （ 55 ）

高齢者と図書館・生涯学習への大学教育の活用：

大学図書館の地域貢献を中心に ……………志保田 務 （ 67 ）

社会調査教育の現段階と将来像

——大学教育の転換期における教材・教授法の開発——

……………木 村 栄 二
阪 祐 あ ね
高 昌 か
吉 昌 介
角 惠 吏
大 嘉 子
倉 季 則
久

近世・近代堺の都市史・地域史研究の可能性 ……………島 田 克 彦 （ 107 ）



桃山学院大学総合研究所